巻頭インタヴュー

西村明　別府大学学長に聞く

“100周年を迎えた別府大学と地域社会”

地域社会研究センターでは、本号より所長の巻頭インタヴューを連載します。初回は、西村明学長に、100周年を迎え３学部体制になった別府大学の将来と地域社会について伺いました。

篠藤所長（以下、篠藤）　まず、今回の学長インタビューを皮切りに各学部と地域社会というシリーズを予定しています。こういったシリーズの冒頭として、学長に全学のことについて是非うかがいたいと思っております。

西村学長（以下、学長）　はい。

篠藤　別府大学は、昨年100周年という法人としての節目になったわけですが、文学部の改組と国際経営学部の創設をしました。その概要を、精神のようなものも含めてご説明いただければと思います。

学長　別府大学の活性化がまず根本問題であると思います。着任してから４年目ですが、次第に研究・教育上で学科を超えて協力していく側面が強くなってきており、別府大学の良さを感じています。

篠藤　学際的研究や教育は時代の要請という面もありますね。

学長　（専門性を考えて）学科の壁を高くするのでなく、壁を低くしていく必要があると思います。

国際経営学部の設置については、もちろん大学の経営上の問題を考えてのこともありますが、大学が存続していくためにも別府の地域振興とか観光産業の発展など、経済に結び付いていく必要性を考えました。大分市は九州圏内では最も重化学工業化している地域であるにもかかわらず、あまり意識されていない。また別府でも流通・商業・観光が国際化してきている。

篠藤　確かに、新日本製鉄や昭和石油など日本を代表する企業も立地しています。

学長　このような状況において、大分経済というのを長い目で見たら、別府大学がこれからさらに100年生き続けるためには、経済・経営の分野での貢献が重要であると思いました。「国際」とつけたのは、留学生を呼び込むというようなことではなく、グローバル化時代の経営という本質的な視点があります。「経営学部」というのは以前には一般的でしたが、今日において別府大学らしい特色を経営教育において生みだすには「国際経営学部」（Faculty of International Business Management）がよいのではないかと考えました。いま経営を考えるときにグローバルな視点を持つことなしには何も考えられません。

ヨーロッパでは、篠藤先生は御承知であろうかと思いますが、（異）文化マネジメントというのは大きな問題となっています。移民労働者が国内に入ってくると、異文化をどのようにマネジメント（計画・統制）するかという問題が非常に重要になってきます。

篠藤　ヨーロッパは多言語圏ですし、移民の問題も大きいですね。

学長　今日では、どこの国においても異文化マネジメント、つまり多様な文化をマネジメントすることが日常茶飯事となっています。アジアの文化とヨーロッパの文化をどういう風にマネジメントするのかが、同一の目的に向かって行かねばならない企業には最大の課題なのです。いま、同じ問題がアジアでも起こっているわけですね。

たとえば、日本の企業が中国へ行って現地の人、或いはタイ、インドの人を雇う。またインドやタイで日本人が雇われる。文化の違う人たちが集まって事業経営をやっていくことになる。同一の事業目的・方針に向かってそういう多様な文化をどのようにマネジメントしていくかは大変難しい問題ですね。その意味でも、文学部も経営（マネジメント）と深く結びついている。

また食物栄養科学部においても、ただ食と健康だけじゃなくて、現実には作ったものをどういう形で市場に提供するのか、作るだけでコストを考えなくていいというわけにはいかない。学校給食や病院食をいくらで作るのかいうことは極めて重要な問題です。

言い換えれば、マネジメントというものを基礎にして文学部も食物栄養科学部も新たに展開できるのではないでしょうか。そして、国際経営学部も文学部や食物栄養科学部の素晴らしい蓄積を取り入れて展開すれば、ユニークなものができるでしょう。文学部、食物栄養科学部、国際経営学部がトライアングルとして発達すれば、それは別府大学の強みとなるでしょう。このような意味で、学部・学科の壁を低くする必要があります。

篠藤　専門も大切だけれども、複合的というんですか、もっと総合的なものが要求されているという時代認識のようなものがあるということですね。

学長　そうです。

篠藤　地域社会の、今後の社会の変化とも関係するんじゃないかという気もしますが、この辺はいかがでしょうか？

学長　私もそう思います。この前のシンポジウム[1]で話しましたが、技術系では入学時から専門を教えなければならないという強い思いがあると思いますが、今年度から始めている初年次教育や導入演習の意味をいま一度考えてみる必要があるように思います。技術系の先生方は入学時からすぐに専門の勉強をさせたい。しかし、私自身の考えでは、各々の専門も今日では４年も経過したら、全く姿を変えて多様化・グローバル化しており、習ったものだけでは間に合わない。たとえば、大分や別府のことだけ考えていて一生を送れる時代じゃなくなっているわけで、専門は徹底的に勉強しなければならないけれども、むしろ習った専門を超えて、応用できる能力、社会に出てどのような所でも自分は対応できるのだという自信をまず学生に持たせなければならない。そこに、導入演習や発展演習の意味があります。

地域の役に立つというのは、ある専門を持つことによって役に立つということと同時に、人間性も考えなければなりません。つまり、大学という小さい所で学んだことが、世界に行って活きることが沢山あるということ

[1] 2009年度別府大学公開講座「新たなる旅立ち-グローバル社会での共生-」第14回シンポジウム「別府大学の新たなる旅立ち」

を学生に自然と知らしめなければならない。導入演習で、大学の基礎的な勉強を先生や友達と一緒になって考え、「先生は大学のとき、どんな勉強したの？」とか「先生は大学生活が楽しかった？」などと話し合いながら、学生たちはそのような会話や先生の態度から何かを学んでいく。このような教員との交わりのなかで専門を学ばなければ意味がないように思います。

篠藤　「学士力」ということばがあります。今、大学に18歳人口の60％くらいが進学していて、かつてはピラミッド型だった学生人口が今や台形型です。台形型で４年間で社会に出るという状況を考えると、発想のしかたとかビヘイビア[ii]みたいなものへの感受性を高め、耕すようなものこそが社会が要請しているものじゃないか、と。４年制大学のかなりの使命がそこにある気がしますね。

学長　確かに現代は知識社会であり、知識のお陰で寿命が延び、無知であることで被害を受けることも多く、知識があらゆるところで物事を動かしている。それから、英語がどこでも自由に頻繁に使われている。確かにそうだけれど、すべてが知識で社会が動いているかといえば、そうではないでしょう？やはり人間としての知識の背後にある心とか思いやり、人間の豊かさを社会は求めている。

篠藤　はい。

学長　若い人たちの中にある知識を動かすエネルギー、意欲が最も大切だと思います。別府大学においても大切なことは、短期的に考えることではなく、長期的な視点に立つことであると思います。先の専門性の問題にしても、「今すぐ役に立つ」ということではなく、４年間役に立たないことを学んでもいいのではないでしょうか。そのようなことが、むしろ将来役に立ってくる場合もあります。大学においては、長い目で物事を見られるような素質を身につけること、そういうものが私は知識社会の基礎ではないかと思います。

篠藤　学長は管理会計学で国際会議を率いるような最先端の学者ですが、あえてそういうお立場で、表面的な情報はどんどん新しくなっていく（から重要ではない）と言っておられることは、かなり文学部的ですね。それはご自身のご体験の中で？

学長　私は、他の先生方も同じ考えをお持ちではないかと思うのですが、学問というのは基本的に人格の表現ではないか思っています。論文というものには、その人の人格が自然と滲み出てきます。会計学という、専門外の人が読んでも全く分からんことを私は論文に書いていますが、それにも自分の生き方や考え方が滲み出ています。それだから学問というのは面白くてたまらないのです。

篠藤　それはある年齢になってから、お感じになったんですか？

学長　大学院で学生を指導している中で思いました。自分自身も、大学院の頃指導教官から「なんじゃこの論文は？」と言われていましたが、それを克服していく中でだんだん自分のスタイルを創り出してきました。論文の内容や形式もやはり自分の人生観と歩調を合わせて発展していきます。そういう意味で作家と同じだと思いますね。会計学も、自分の人生観を通して研究している。それは創造力であり、いかなる学問領域にも共通する問題意識を表現しようとしていると思います。

篠藤　私も専門書を小説のように読んでいるという自覚があります。

先ほどのお話で、経営・経理も異文化理解なんだということをうかがってすごく面白いと思いました。国際化で異なった行動様式と価値観を持った人が、たとえばトヨタで一緒に仕事をすることになりますね。トヨタがドイツに進出したときに労働争議を連発されて、トヨタ支社は最低の状態だったんですね。そのときちょうど支社長に出会って、彼

[ii] behavior　従業員や組織としての行動様式、行動パターンのこと。

は髪が真っ白になるまでドイツ人スタッフとことん話し合っていると言っていました。トヨタもそれで自動車王国ドイツにその後の足場を作れたんだと思います。

お話に出た異文化は、学長のご専門あるいは海外に行かれて見聞きされたことから感じられたのでしょうか？

学長　中国に１年間、ニュージーランドにも１年間滞在して、また国際学会も開催したりして、外国人と話したり、生活する中で学んだことが多いと思います。もうひとつは別府大学に来てからの環境もあると思います。別府大学に来て良かったことは、文学部の中に自分の専門が全く無くて、専門外の「経済史」や「異文化交流研究」等を講義したことです。これは経済学部の先生から見れば全く乱暴な話ですが（笑）、このお陰で文化や歴史に関して多く勉強をすることになりました。そして、もともと中国、ドイツ、アメリカ等の会計学の比較研究を行っており、ニュージーランドではホフステッドの研究を踏まえて「会計と文化」ということを勉強し、論文を書いていましたので、異文化問題はもともと大きな関心事でした。会計というものはどこの国で行っても同じように思われるかもしれませんが、やはり国によって違ってきます。それが国の風土、社会環境（文化）とどのように関係しているのかを研究しておりました。

ヨーロッパではすでにECができたときから、異文化マネジメントが意識され始め、移民や東欧との統合がそれをさらに具現化させてきたのではないでしょうか。日本人にはそのような宗教と文化が複雑に絡み合った多民族の問題はわからない。ところがグローバル世界になって日本企業はその中にどんどん入り込んでいきますから、異文化交流や文化マネジメントに戸惑うことになる。つまり日本的経営がそれぞれの外国で衝突していく、このような問題が私の研究課題でした。

別府大学で異文化交流について講義をしている中で、根本的に異文化とは何か、イスラム教とキリスト教との対立とか、中近東の問題がなぜ起こってくるのか、異文化というものが本当に調和するのか、それとも対立せざるをえないのか、これらのことが世界の基本的な問題であると捉え直しました。それを企業の中でマネジメントするなんていうことは本当にできるのか…。マネジメントするということは経営者の立場から異文化問題を計画・統制し、収益を上げるということであるが、これは難しい問題であることを認識すると共に、現代の社会は文化でさえマネジメントしなきゃならないところまで来ているということを認識しました。

文学部や食物栄養科学部の先生方はマネジメント的な思考を持っておられないと思いますが、やはり、これは大変重要な問題であると思います。現実には両学部の各々の専門もマネジメントと重なり合っているのですが、なかなか意識されない。あまり専門に特化してしまうと見えない部分が出てくることがあるのではないでしょうか。私の場合は、もともと会計学が嫌いでしかたなかったのです（笑）。その領域だけを考えていましたので……。

篠藤　はい（笑）。

学長　学生の頃は、当時長い歴史と強大な隣国でありながら何も分からない、また理想化されていた「社会主義国」である中国に興味を持って、中国経済をやろうと思っていました。まず政治学から始め、経済学に入り、徐々に中国経済に広がっていきましたが、このような遠回りをした結果、現在では一番好きなものは会計学です。これ以上面白い学問はないと思っています。

篠藤　冒頭からの続きになりますが、３つの学部があることが大きい、つまり、人文・社会・自然の、小なりと言えども３つの切り口を持っているという意味で、今後の可能性は大きいと思います。

学長　私もそう思います。３つの学部の融合ではなく、それぞれの柱をしっかり立てながら、お互いの持っている素晴らしいものを相互に吸収する力を持ち、そして共同研究を行い、

ユニークな研究成果を生み出せば、日本でも珍しい大学になると思います。

篠藤　政府の文章でも至る所に「地域社会」ということばがあるんですが、実際は地域の先細りがすごい勢いで進んでいる。東九州という立地の中で、先行きは明るくないとも言えます。学長の展望はいかがでしょうか？

学長　ニュージーランドのオタゴ大学[iii]というところに居たのですが、そこの都市人口は当時約12万程度。そのうち大学の人口が2万人で、大学町なのです。大学生で町が結構賑わっている。ニュージーランドの生活は非常にゆったりしていて、私が土曜日も研究をしようとしていたら、若い先生がやって来て「アホちゃうか！？」というような顔をする（笑）。そして、テニスをしようとか、サッカーをしようと誘いに来ます。年齢なんて関係なくて、体が動くなら一緒にプレイし、共に生活をエンジョイしようという気風がありました。能率・効率をいかに上げるかということばかりを考えるのではなく、生活を共に楽しむというか、そんなに経済的に豊かにならなくてもゆっくりと自分の時間を持ち、生活を楽しむという、非常に長いスパンで物事を考えている、このような生き方から学ぶものが多くありました。

日本の大学を見ると、どうしても効率主義・業績主義が強くなりますね。別府でオタゴのような生き方ができないものかと考えたりもしましたが。別府の中の別府大学は、約5,000人位の大学人口とその関係者たちを抱える、ものすごく大きな地域基盤を有しています。地域に直接貢献することを考えるのもいいのですが、別府大学そのものが存在価値を明確にすることによって、地域の人たちが別府大学を意識していくことが地域への貢献だと思います。そのためには、別府大学そのものが発展しなければならない。

それと、直接的な貢献ということなら、なにか面白いことを企画したらいいと思います。別府大学駅から大学までの大学通り、香りの博物館を通って鉄輪に抜ける道は、別府大学に赴任したときからとてもいい通りだと思っていました。一昨年、サンディエゴ大学[iv]から来た先生もこの大学通りをすごくいいと褒めてくれました。古い町並みから温泉につながって、人びとで賑わっている。特別何もないのだけれども人が集まって踊ったり歌ったりしている街並みがドイツやフランスで見られるように、そういうのがここにできればいいなあと思ったりしています。経済というのは「人と人との交わり」で、その結果消費や生産が生まれてくるわけですから、人が交わる場を作ってあげる、大学が中心になってこの通りを含めて何かをして、温泉につなげていくようなことも大学の仕事じゃないかと思いますね。いまの学生はそのような豊かなアイデアをどんどん出すのではないでしょうか。

篠藤　ずっと大学にいると、さりげない風情のようなものの価値が見えてこないんですね。外から学長やサンディエゴ大学の先生が来られて、初めて見つけてもらう。大学というのはいろいろな側面を持っているものなんですね。

学長　大学は大きくなることだけが重要なのではなくて、まず活き活きすることが大事なのですよ。文学部は小規模教育でずっとやってきましたが、授業の区切りの鐘が鳴らずに学生が強制されずに学園生活していることが良いと思います。学生も人懐っこい。別府大学の学生は磨けば伸びる学生が多い。先生たちも、自分のありのままの姿をさらけ出して学生と触れ合ってほしい。かつて私も先生と話し合いながら、先生の生き方・考え方を学んできましたので、それを是非行ってしてほしいと思っています。

篠藤　今日は実に幅広いお話を聞かせていただきました。ありがとうございました。

---

iii　Otago　オタゴ大学はニュージーランド最古の大学。南島南東部のダニーデンにある。
iv　米国サンフランシスコ州のサンディエゴ市にある私立総合大学。